

壱岐古墳群

壱岐の地には古墳が点在している。古墳は、遺骨を埋葬するための部屋を巨大な石で塞ぎ、その上に円形または鍵穴形の土塁を築いたものである。主に 6 世紀後半から 7 世紀前半にかけて、島内に約 280 基の古墳が造られた。壱岐の古墳は、その普及率もさることながら、その大きさも特筆される。最大級のものは、当時日本列島を支配していた大和朝廷の大墳墓に匹敵し、内部からは極めて貴重な品物が発見されている。これらの特徴は、古墳が造られた時代の中央集権国家にとって、壱岐が戦略的に重要であったことを物語っている。

古墳が造られた時代の壱岐の戦略的重要性を物語っている。6 世紀から 7 世紀にかけて、大和朝廷とその同盟国は朝鮮半島の新羅と戦っており、壱岐は前線に人員や物資を送るための拠点として機能していたと思われる。古墳に埋葬された有力者は、地元の首長や大陸から派遣された司令官など、大和政権の高級武士であった可能性がある。大規模な古墳の建設には相当な労働力が必要であり、その存在は人口の多さを暗示している。大型の古墳の中には、朝鮮半島に面した高台に目立つように、つまり海から侵入してくる敵を追い払うために造られたものもある。

壱岐の古墳の中には、築造後何百年も経ってから墓として使用されたものもある。日本では古墳は埋葬された後、入口を隠して封印されるのが普通であるが、壱岐の古墳は代々埋葬され、同じ家族の墓であった。そのため、墓荒らしに狙われやすかったが、それでも埋葬されていた貴重な遺品の一部が回収され、一支国博物館などで展示されている。壱岐にある最大級の古墳のうち 6 基が一つの国の史跡に指定され、そのうち掛木古墳と笹塚古墳の 2 基は一般公開されている。